

# 早期英語教育のための語彙リスト 開発過程<sup>1</sup>

町田 なほみ・小林 美代子・長谷川 信子  
神田外語大学

本稿は、神田外語大学言語科学研究センターでの「早期英語教育プロジェクト」の課題の一つ「早期英語教育のための語彙リスト開発」での試みとその過程を紹介する。他の研究で提示された語彙リストとの比較検討も含め、最終的に選定された956語<sup>2</sup>の語彙リスト「KUIS語彙リスト」の特徴を明らかにする。KUIS語彙リストは、品詞・意味範疇についての情報が記載されているなど、他の語彙リストにはない特徴を持つが、今後も改訂を重ね、児童の語彙習得に関わる基礎研究だけでなく、実践的な教材開発・カリキュラム・教室活動などにも有用性の高い語彙リストとすることをめざしたい。

## 1. はじめに

文部科学省は、2002年『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想』を掲げ、翌年の行動計画において、小学校の英語活動の支援を明示した。その後、英語活動を行っている小学校は年々増加し、平成18年度では95.8%の小学校で、何

---

<sup>1</sup> 本稿は、長谷川他(2006)及び小林・長谷川・町田(2006)(いずれも口頭発表)を基に加筆・修正したものである。

<sup>2</sup> 後述するが、本プロジェクトでは、品詞と意味範疇が異なる場合、一つの語を別の見出し語として扱った。956語はそのような算出法に基づく語数であり、品詞・意味範疇の違いを異なり語としない伝統的な見出し語算出法では898語となる。(詳細は、2. 語彙リスト開発過程を参照のこと。)

らかの英語活動が行われていると報告されている。しかし、その目標・指導法などについては何ら意思統一が図られておらず、指導頻度、指導形態、及び指導内容に大きな地域・学校間格差が生じている。

2007年には中央教育審議会にて、小学校5、6年生を対象に正課としての英語活動導入が提言された。これにより、2011年度から同学年を対象に、週一度の外国語活動導入が決定され、つい先ごろ新しい教育指導要領（案）が発表された。しかし、正課としての導入は、単に学習領域が示されただけであり、学習の到達目標は依然として明確にされておらず、指導内容も定義されないままである。

こうした状況の中、神田外語大学では、早期英語教育での多くの活動が、ことばの基盤となる語彙の導入に重きを置いている（Cameron, 2001など）こと、成人向けの言語教育でも、語彙知識が言語力と深く関わる（Nation, 1990; Folse, 2004など）ことなどから、「早期英語教育のための語彙リスト開発」を課題とし、その結果を基盤とした「英語能力判定テストの開発と実施」を目標に、2004年に「早期英語教育プロジェクト」を立ち上げた<sup>3</sup>。

このプロジェクト推進に当たり、(1)母語の語彙発達、(2)成人英語学習者の語彙習得、(3)早期英語教育における語彙習得に関する先行研究を参考にして、考察を深めた。(1)については、小椋（2000）が、1993年に米国で開発された

---

<sup>3</sup> より具体的には、本プロジェクトは、文部科学省所管の独立行政法人科学技術振興機構社会技術研究開発センターが実施する研究開発プログラム「脳科学と教育」（タイプII）委託研究「言語の発達・脳の成長・言語教育に関する統合的研究」（研究代表者：萩原裕子、首都大学東京）のサブ研究領域『言語学・応用言語学に基づく、外国語能力の検査、判定、評価法の開発』（研究機関代表者：長谷川信子）に属する研究である。また、本研究と関連する早期英語教育研究プロジェクトとして、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)『早期英語教育の指導者養成及び研修の実態と将来像に関する総合的研究』（2004-2006年度、課題番号16320075；研究代表者：小林美代子）、および同補助金基盤研究(B)『早期英語教育指導者の養成と研修に関する総合的研究』（2007-2009年度、課題番号19320085；研究代表者：小林美代子）がある。

*MacArthur-Bates Communicative Development Inventories* の日本語版を作成し、8ヶ月から30ヶ月の乳幼児の語彙発達傾向を調査している。また(2)については、Hindmarsh (1980)が、同じ語であっても品詞や意味範疇によって、習得段階が異なることを示した語彙リストを提示している。さらに(3)に関しては、Cameron (2001)が、外国語学習の初期段階における語彙学習の重要性を説いている。

早期英語教育のための語彙選定を試みる研究も、様々な手法で行われている。Rixon (1999)は、英国で出版され国際的に普及しているコースブック7種を言語資料とし、これらの中核をなす889語を抽出している。石川 (2006)は、日英両言語を対象言語とし、児童のための国内外の言語資料から、早期英語教育のための語彙1847語を抽出している。また、中條他 (2005)は、英語母語話者・第二言語としての英語学習者・日本人英語学習者のための英語絵辞書を比較し、重複語をリスト化している。

さらに、日本における英語教育の観点から、中條他 (2006)は、日本で出版されている小学校英語活動用テキストと指導書を言語資料とし、これらに出現する語彙を比較し、各語のテキスト出現度数<sup>4</sup>を明らかにしている。また、西垣他 (2007)は、中学校英語検定教科書出版社が出版している小学校英語テキストに出現する語彙と中学校英語教科書、高校英語教科書に出現する語彙の意味領域を比較した上で、小学校英語テキストの語彙の特徴を分析し報告している。

本研究プロジェクトでは、上記の先行研究結果や語彙リストとも比較可能となるような形で、独自の検討・語彙抽出方式により、956語を含む語彙リスト(KUIS語彙リスト)を編纂した。この語彙リストは、単なる単語の一覧にとどまらず、

---

<sup>4</sup> 出現度数とは、何種類の言語資料に当該語が出現したかを示すもので、中條他 (2006)では、頻度と区別するため「レンジ」という語を使用している。

各々の語の意味的・文法的特徴も情報として含めている。成人語彙や中学校での導入語彙との比較も可能な早期英語教育のための統合的言語資料データとしての機能も持ち、教育の実践現場においても有用性の高いものとなるよう工夫した。以下、その開発過程と特徴を報告する。

## 2. 語彙リスト開発過程

### 2.1 基本コーパス作成のための言語資料

本研究では、早期英語教育にとって有効な語彙抽出のために、海外における早期英語教育をも視野に入れ、世界的に広く使用されている *Let's Go* と *SuperKids* の二つのコースブックを語彙データ収集の基本的な言語資料と選定した(資料1参照)。これらのコースブックは、英語を外国語とする児童を対象とし、前者が7レベル、後者が6レベルから成っている。日本での早期英語教育プログラムは、未だ開発途上で、早くから系統立てたプログラムを推進してきている国での英語教育に比し、必ずしも高いレベルのものとは言えない。したがって、コースブックの上位レベルは、平均的日本人児童には難度が高いと判断し、日本で使用されている小学生用英語テキストの代表的なものを参考にした上で、前者は下から5つのレベル、後者は下から4つのレベルをデータ収集対象の適正レベルとした。

これらのコースブックには、それぞれ巻末に語彙リストが掲載されているが、本研究では、児童が教室内で見聞きする語彙を網羅するために、コースブックの本文に加え、タイトル・指導者が指示に使用する表現や語句・イラストに付された語句を全て入力した上で、後に語彙選定作業を行なうこととした(語彙の選定基準・選定過程の詳細に関しては2.5、2.7に詳述)。収集された延べ語数は、コースブック *Let's Go* が16,581語、*SuperKids* が14,803語であった。その後これら

の語をレマ化（レマ化基準は 2.2 で詳述）した後、異なり語数を算出した。それぞれの語数は 1,458 語と 1,257 語であったが、これらのうち 731 語は二つのコースブックで重複していたので、それを勘案したものを基本コーパスとした。ただし、延べ語を異なり語にする際、一つの語で複数の品詞及び意味範疇を持つ語は異なり語として取り扱った（2.3、2.4 に詳述）。さらにデータ化の際、各語彙項目がコースブック内で果たす役割を示すため、資料 2 に挙げたコースブック内での役割分類を入力すると共に、各語の出現回数を入力し、後の語彙選定基準作成（2.5 に詳述）の際の参考資料になるよう工夫した。

## 2.2 レマ化基準

基本コーパスのレマ化作業の基準は、原則的には活用形や変化形を持つ動詞・名詞・形容詞は原形を基本形とした。ただし、以下のものについては、『大学英語教育学会基本語リスト（JACET List of 8000 Basic Words）』（2003）（以下 JACET8000 とする）に収録されている「本プロジェクトにおける語の定義」および *British National Corpus*（以下 BNC とする）における用例を参考にし、言語学的検証を行った上で、次のように定めた。

1) 複数形が一般的とみなされるものは複数形を基本形とする。

① 衣類

pants, shorts, mittens などの語は単数形を基本形とするが、jeans は複数形を基本形とする。（BNC 参照）

② 日用品

chopsticks, scissors は、複数形を基本形とする。

2) -ing, -ed の派生接辞による変化のため形容詞化した interesting, interested, colored はそのままの形を基本形とする。また、名詞化した swimming, skating, telling もその

ままの形を基本形とする。

- 3) 縮約形は元の形に戻し、それぞれを基本形とする。
- 4) 所有の-'s の語彙は、-'s を削除したものを基本形とする。

### 2.3 品詞情報の付与

上記のレマ化作業と同時に、各語彙項目に対して品詞情報の付与を行った。それぞれの品詞の識別は、コースブック内の用例から判断して手作業で行ない、その区分は、一般的な文法書などで広く用いられている分類を採用し、資料3のように15種とした。同じ語であっても複数の品詞を持つ場合（例：answer 名詞「答え」と動詞「答える」など）は、異なり語として扱った<sup>5</sup>。この手法は、同じ単語であっても、異なる品詞など複数の側面を持つ場合、その習得は一様ではないとする先行研究（Hindmarsh, 1980）を参考にしたものである。Hindmarsh（1980）は成人英語学習者を対象に編纂した語彙リストの中で、個々の語が持つ複数の品詞や意味を詳細に吟味し、学習段階における違いを反映させている。KUIS 語彙リストも同様の手法を採用することとした。

### 2.4 意味範疇の付与

基本コーパスには、上記の品詞情報付与と共に、意味範疇についての情報の付与も行った。意味範疇の分類は、第一段階として、米国で1993年に開発された *MacArthur-Bates Communicative Development Inventories* の日本語版開発研究（小椋, 2000）の「ことばと身ぶり」「ことばと文」に示された語彙項目の分類枠組みを採用した（資料4を参照のこと）。

しかしながら、小椋（2000）は、調査対象者が8ヶ月から30ヶ月の乳児と幼児であり、本研究の対象者である就学期児童とは年齢の隔たりがある。小椋の語彙項目分類では、本調

---

<sup>5</sup> 辞書では品詞が異なっても見出し語とはしないが、本研究では教育的観点から、異なり語とする配慮をした。

査で抽出した総異なり語の約 2 割に当たる語を明確に分類できないことが判明したため、以下の観点を反映させて、小椋の語彙項目分類を改訂する必要性を認識した。

- ・ 「幼児語」の項目は、就学期児童の語彙には出現しないので、不必要であろう。
- ・ 「おもちゃ」として分類されている pencil, pen, crayon, book は就学期児童にとっては、「学用品」といった異なる意味範疇とするのが適当と思われる。
- ・ 「家具と部屋」「(小さな)家庭用品」「戸外のもの(と場所)」「おでかけ」の項目が大きくくりであるが、就学期児童にはより細分化した項目立てが求められる。
- ・ 副詞・前置詞に対応する語彙項目分類は「時と場所」のみであるが、それでは分類しきれないもの(例えば、理由、方法など)があり、異なる項目が必要である。
- ・ address, magic, news などの抽象語を分類する意味範疇が必要である。
- ・ 天気・病名・形など児童にとっては身近な事柄を示す項目が必要であろう。

これらの点から、本研究では、異なる分類法の採用を検討し、『JACET 基本語 4000』(1993a) 編纂の際、意味・機能分類として採用した(大学英語教育学会(JACET)教材研究委員会(編), 1993b) *Longman Lexicon of Contemporary English* (1992) (以下 LLCE) の 14 種の範疇での分類を試みた。この意味範疇を採用した分析では、小椋(2000)を採用した場合に比べて、より多くの語の分類が可能となった一方、就学期児童にとって不自然な分類が含まれるという問題も生じた。以下にいくつかの例を挙げる。

まず、コースブックには同一単元で指導される「形」を表す語が多く提示されているが、LLCE では、circle, rectangle,

triangle は「数・度量衡・金融・商業」<sup>6</sup> に、diamond, heart はトランプのマークとして「娯楽・スポーツ・ゲーム」に分類される。この違いは、使用対象者の年齢の違いによるものと考えられるが、トピック中心の学習活動が多い早期英語教育においては、一括して「物の形」として分類した方が、有用性が高いと思われる。

また、就学期児童の社会的活動内での視点では、同一の意味範疇と考えられる語彙に、不自然な分類が生じた。例えば、「学用品」ととらえると思われる語のうち、crayon, eraser, notebook, pen, pencil が、LLCE では「思考・伝達・言語・文法」に、ruler, scissors, stapler, glue, ink は「物質・器具・電気・武器」に分類される。また、日常生活における「持ち物」ととらえるであろう bag, watch は「物質・器具・電気・武器」に分類されるが、handkerchief, umbrella, wallet は「建物・家・家庭・衣服」に分類されるという不都合が認められた。

語彙習得も含め言語習得は、一般に年齢と共に「具体」から「抽象」へ、「身近」から「社会」へと徐々に対象が広がると考えられているが（西垣他, 2007）、上記で指摘したような語彙の意味分類に見られる違和感・不整合は、成人と就学期児童の言語習得における対象の広がり具合の違いによる可能性があり、意味範疇のとらえ方が異なることを反映していると思われる。

こうした考察から、成人英語使用者を対象とした LLCE の 14 分類では、本研究での基本コーパスの語彙を含め、就学期児童向けの語彙を適正に分類することは難しいと判断し、独自の分類法を設定することとした。

独自の意味範疇枠組みを決定するにあたり、前述の 2 種類の意味範疇を比較すると、小椋（2000）の対象者が、言語発

---

<sup>6</sup> 和訳は大学英語教育学会 (JACET) 教材研究委員会 (編) (1993b) の表現を使用した。



達の点から、就学期児童により近いため、この語彙項目分類を細分化することにした。その設定には、特に *Cambridge Young Learners English Tests Handbook* (2003) 巻末のテーマ別語彙リスト分類を参考にし、最終的に資料5のように決定し、基本コーパス中の各語に意味範疇情報を付与した。

意味範疇情報の付与作業においても、コースブック内の用例に合わせ、一つの語が複数の意味範疇を持つ場合（例 balloon：風船と気球、glove：野球用品と手袋）は、それらを異なり語として扱うことにした。これは、品詞情報の付与(2.3参照) 作業でも参考にした Hindmarsh (1980) の手法を応用したものである。その結果、総語数は1984語となった。

## 2.5 第一次語彙選定

KUIS 語彙リストは、長期的には教材開発やカリキュラム開発も含めた早期英語教育全般に寄与することを視野に入れているが、子ども用語彙テスト開発の基盤として使用することを当座の目的として編纂した。その目標にも鑑み、第一次語彙選定では、テスト項目となりうる語であることを第一義的に考え、また、第二言語教育における語彙習得の観点 (Hindmarsh, 1980、山本, 2005、今井・針生, 2007) を参考に、名詞（固有名詞を含まず）・動詞・形容詞・副詞・前置詞の5品詞のみを抽出した<sup>7</sup> (資料3参照)。

この第一次語彙選定過程において、まず、資料2に示した言語資料のコースブック内における役割のうち、subtitle, unit, prompt, phoneme, direction, instruction に分類される語彙は、主に指導者が使用し、児童が習得する語彙範疇には入らないことから削除した。また choice のうち true, false の2語も、教室内活動での使用は多いが、同様の理由から削除した。

---

<sup>7</sup> 語彙テスト項目になりうるものという観点から、代名詞や機能語などは削除したが、指示語として使用可能な語として別リストを作成した (資料6参照)。

次に、英語の単語と判断できない数学記号・数 (NUMBER)・アルファベット (ALPHABET) も同様に削除した。

## 2.6 他の言語資料からの情報入力作業

前述の第一次語彙選定過程を経て基本コーパスから一部の語を削除した後のリスト (以下「基本コーパス 2」と称する) に、下記 (表 1) の言語資料からの情報を加えた。これは、言語資料間の比較を容易にし、それぞれの語の特性を明らかにするためのものである。

表 1 付加情報として使用した言語資料<sup>8</sup>

海外早期英語教育教材	Cambridge Young Learners English Tests Handbook
海外成人英語資料	British National Corpus
	Nation's Range
国内早期英語教育教材	アルク 2000 語じてん
国内中学校用検定英語教科書	Columbus 21 (1~3 年生用)
	New Crown (1~3 年生用)
	New Horizon (1~3 年生用)
	One World (1~3 年生用)
	Sunshine (1~3 年生用)
	Total (1~3 年生用)
	Total active. comm (1~3 年生用)
国内成人英語教育教材	JACET8000

まず、基本コーパス作成に使用したコースブック同様、広い視野に立った早期英語教育の観点から、*Common European Framework of Reference for languages: Learning, teaching,*

<sup>8</sup> 言語資料詳細は、本稿末の資料 1 を参照。

*assessment* (2001) を考慮して開発された *Cambridge Young Learners English Tests Handbook* (2003) を選定し、Handbook 巻末語彙リストを参照し、*Cambridge Young Learners English Tests* の3レベル (Starters, Movers, Flyers) のいずれのレベルに各語が出現するかの情報を得た。

次に、成人英語母語話者のコーパスとして世界で最も汎用されている *British National Corpus* のランク情報<sup>9</sup> と、語彙の代表的研究である Nation の Range で得られた頻度レベル情報<sup>10</sup> を加え、成人の言語使用についての情報を追加した。

日本国内での早期英語教育の観点からは、研究・実践面共に広く活用されている『アルク 2000 語絵じてん』(久埜, 2000) を選定し、各語が『絵じてん』に出現しているか否かを確認し、出現している場合はその回数を併せて入力した。

日本における早期英語教育を、一貫した英語教育の流れととらえる場合に必要不可欠となる情報として、中学校英語教科書と、成人英語学習者教材の JACET8000 (2003) を言語資料とした。中学校英語教科書7種のうち何種の教科書に各語が出現するか、また、JACET8000 において各語がどのレベルと規定されているかを確認し、それぞれ入力を行った。

## 2.7 第二次語彙選定

上記 2.6 で示した国内外での早期英語教育言語資料、成人英語教育言語資料、そして成人英語話者の言語資料についての情報を加えた後、これらを参考にして、「基本コーパス2」に含まれる各語が、早期英語教育のための語彙として適切であ

---

<sup>9</sup> *British National Corpus* では、英語母語話者の言語使用材料を基に、各語の使用頻度を算出している。ランク情報とは、*British National Corpus* で提示されている頻度の順番を示す指数 (ランク) である。

<sup>10</sup> Nation は、West の *General Service List*、Coxhead の *Academic Word List* などの語彙頻度情報を参考に、1) 最も頻度の高い1000語、2) 次の1000語、3) 1、2のどちらにも該当しないが、高等学校・大学等のテキストに頻出する語からなる基礎語彙リスト (Basic Word List) を作成した。KUIS 語彙リストでは、収録各語にこの情報を付与した。

るか否かを再度検討した。

ここでは、付与した意味範疇のうち、例えば、shape, animal などの上位語 (GENERAL)、arrival, career など外国語 (FL) 学習環境下の早期英語教育では、概念を理解するのが困難と思われる抽象語 (ABSTRACT) は、児童のための語彙テストの対象語彙としては不適切であるとの観点から、リストから削除した<sup>11</sup>。また、文化的な要素が色濃い carol, igloo や、FL 環境下では馴染みの薄い動物の名前 (例: fawn, kookaburra, moose) など、日本人学習者にとっては異質と感じられる語も同様に削除した。これらの語を削除する際には、2.6 に挙げた言語資料からの追加情報を十分考慮した。以上の第二次語彙選定作業を経た結果、最終的な選定語彙として 956 語<sup>12</sup>が得られた。

## 2.8 他の語彙リストに関する情報入力

最終的に選定された 956 語を含む語彙リスト「KUIS 語彙リスト」には、他の言語資料情報に加えて、石川 (2006) の選定した 1847 語との重複を確認し、重複している場合は、石川リストに示されている順位<sup>13</sup>情報を入力した。また、中條他 (2006) が分析した 5 種の小学生英語活動用テキストと指導書に出現する語との重複も確認し、中條他リストでまとめられたテキスト出現度数<sup>14</sup>に関する情報を加えた。

---

<sup>11</sup> 本語彙リストは、2.5 に示した通り、語彙テスト開発の基盤として使用することを中心的目的として開発したもので、テスト項目としての汎用性を高めるために語彙の削除作業を行なった。しかし、教師による指示語として使用が可能なものは、資料 7 で示すように別リストを作成した。

<sup>12</sup> 選定された 956 語は、前述の通り、1 つの語が複数の品詞・意味範疇を持つ場合は、異なり語として算出したものである。一般的な辞書の見出し語と同様の手法で算出すると総語数は 898 語となる。

<sup>13</sup> 石川 (2006) のリストの各語は、頻度の高い順に番号が付与されており、「順位」としている。

### 3. 神田外語大学(KUIS)語彙リストの特徴

以上の過程を経て選定された語彙リストの 956 語の品詞別割合は、図 1 の通りである。図 1 から明らかなように、名詞がその大部分を占めている。この結果は、子どもが名詞を最も早期に習得するという報告（小林・佐々木, 1999; 小椋, 2000）と同様の傾向が見られ、興味深い。

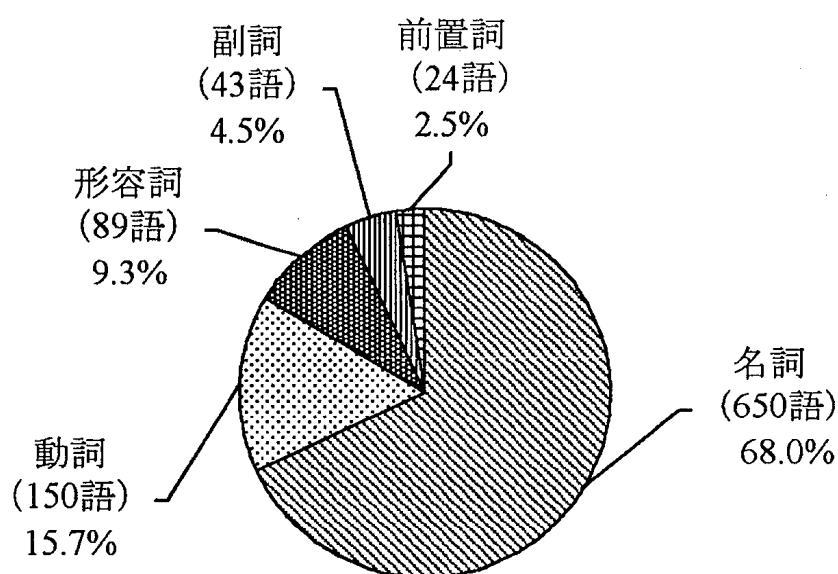


図 1 KUIS 語彙リストの品詞割合（総語数 956 語）

日本人学習者を対象とし、早期英語教育のための語彙を選定した石川（2006）および中條他（2006）のリストとの重複語は、図 2 のようにそれぞれ 559 語（62.2%）、627 語（69.8%）、さらに 3 種の語彙リスト全てに出現する語彙数は 461 語（51.3%）であった<sup>15</sup>。

<sup>14</sup> 脚注 4 参照。

<sup>15</sup> 石川（2006）および中條他（2006）の語彙リストは、KUIS 語彙リストで削除した品詞（2.5、2.7 参照）を含んでいる。同条件での重複度算出のために KUIS 語彙リストで削除した品詞に当たる語を両リストから削除すると、それぞれ 1674 語、1280 語となった。また、KUIS 語彙リストでは同一語であっても品詞・意味範疇が複数ある場合には異なり語として扱ったが、これも両リストに揃えて、それぞれ一語にまとめた結果、KUIS 語彙リストの見出し語は 898 語となった。これらの換算後、3 つのリストの重複度を算出した。

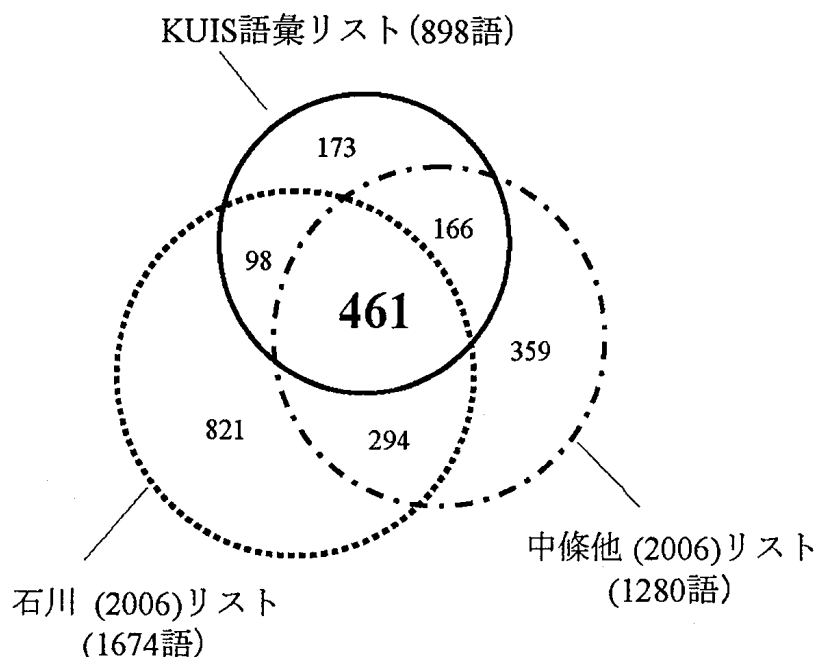


図2 KUIS 語彙リストと石川（2006）・中條他（2006）  
リストとの重複度

図2が示すとおり、両先行研究と本研究とで使用した言語資料は異なるものの、選定語彙の重複度は比較的高く、本語彙リストに収録された語彙は、先行研究と類似の傾向があると認められた。

また、成人英語学習者向けの語彙リストである JACET8000 と KUIS 語彙リストとを比較したところ<sup>16</sup>、下の図3で示す通り、37.4%の336語が JACET8000 の1000語レベルに含まれることが分かった。続く2000語レベルには17.4%にあたる156語が含まれており、合わせると55%近くの語が基礎的な

<sup>16</sup> JACET8000 は、意味範疇の付与がない。また、品詞の付与はあるが、従来の見出し語方式で提示された語彙リストである。同条件での比較を行なうため、KUIS 語彙リストの語のうち、異なり語としているものを一語とし、総語数を898語とした上で割合を計算した。また、KUIS 語彙リストは、2.5で記述した通り、語彙テストの項目になりうる語を抽出するために、名詞・動詞など5品詞に絞ったため、JACET8000 の1000語レベルに含まれる代名詞や Be 動詞などの機能語が含まれていない。これらを含めると、1000語レベルの語の割合は若干高くなるものと推測される。

2000 語レベル以内であることが分かる。一方で 16.6%にあたる 149 語が JACET8000 の中に含まれていないことが分かった<sup>17</sup>。よって、選定された語彙は、基礎的なレベルである側面を持つと同時に、成人英語学習者とは若干異なる学習者向けのものであることが推測できる。

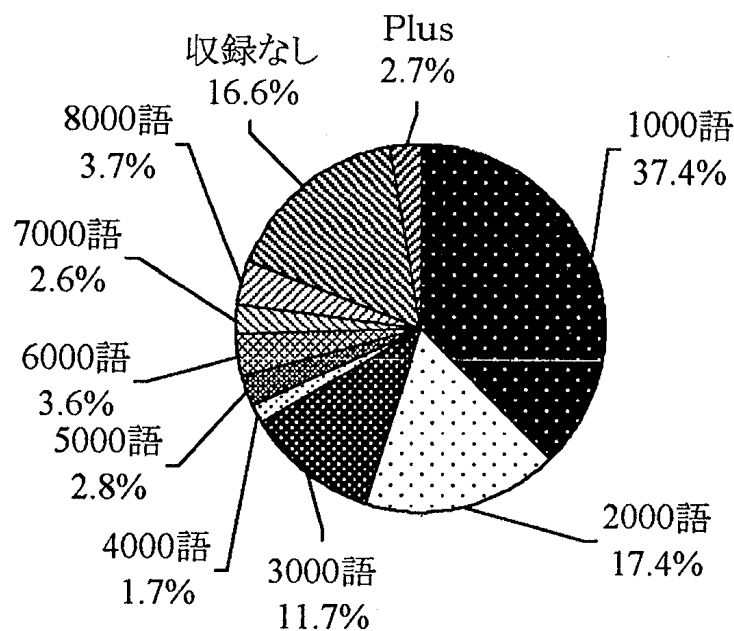


図 3 KUIS 語彙リストと JACET8000 の比較 (資料 8 参照)

KUIS 語彙リストは、子供の母語習得において名詞を早期に習得するという語彙習得研究の報告とも整合しており、また、他の早期英語教育用の語彙リストとも重複する語彙の多いことが判明した。また、成人英語学習者の語彙リストとの比較では、本リストに含まれる語彙の 55%近くが、成人語彙リストの 2000 語までの基本的レベルに属し、これらの語が基本語彙であり、早期英語教育に適していることを裏付けた。しかし同時に、KUIS 語彙リストには、成人英語学習者のた

<sup>17</sup> 各レベルでの品詞別出現語数とその割合は、資料 8 を参照。

めの語彙リストには分類されていない語彙も多く含まれていることから、早期英語教育のための語彙は、成人の語彙とは異なる性質を持つことも明らかになった。これらの語彙は、子どもの世界を反映するような動物の名前、日常生活の中の道具や身の回りのものなどが含まれると考えられる。

#### 4. おわりに

本稿で報告した KUIS 語彙リストは、神田外語大学言語科学研究センターにおける早期英語研究プロジェクトの一環として、「子どものための語彙テスト」開発研究に援用できることを視野に入れて開発されたものである。そのため、テスト項目になりうる品詞・意味範疇であることを念頭に語彙の選定作業を行った。その結果、機能語や指導者の指示に使われる語彙を含まないなど、他の語彙リストとは多少異なる特徴がある。国内外で広く使用されている児童英語学習者用コースブックの初級・中級向けの部分を語彙選定の基盤とし、リストには総数 956 語が含まれ、その 7 割近くが名詞である。本リストは、他の早期英語教育用語彙リストとの比較だけでなく、成人母語話者の語彙、成人学習者の語彙リスト JACET8000、中学校英語検定教科書 7 種からの情報も含んでおり、早期英語教育のための語彙の特性を知る上で貴重な資料となると思われる。

本語彙リストに選定された語彙は、先行研究である石川 (2006)、中條他 (2006) の語彙リストと類似した語彙を含む傾向を示しているが、これらの研究で提示された語彙リストとは大きく異なる点が三つある。

第一点は、各語に品詞情報を付し、一つの語が複数の品詞を持つ場合には、異なり語として扱っている点である。前述の通り、同じ語であっても、複数の品詞を持つ場合は、品詞の違いによってその語の習得が一樣ではない (Hindmarsh,



1980) ことから、一つの語を品詞ごとに異なり語として扱うこの手法は、語彙習得に対して十分な教育的配慮を施していると言えよう。

第二点は、品詞に加えて、各語に意味範疇の情報を付し、品詞同様、一つの語が複数の意味範疇を持つ場合は、異なり語として扱っている点である。これも、品詞情報を付与した作業同様、同じ語であっても意味範疇が異なると、習得が一樣ではない (Hindmarsh, 1980) ことを考慮したためである。

KUIS 語彙リストの最も特徴的かつ有用性の高さに通じる点は、各々の語に付した意味範疇分類の枠組みを独自に開発したことである。先行研究や成人語彙研究に用いられている意味範疇の枠組みでは、就学期の児童が学習する語彙の特徴を必ずしも的確に反映できないことを認識した結果である。就学期児童の視点やコースブックでの分類を考慮した、新たな意味範疇分類枠組みは、学習者・指導者のいずれにとっても、より受け入れやすいものであると思われる。特に、トピック中心で運営される機会の多い早期英語教育での活動にとって、様々な形で利用可能となる有用性の高いものと確信する。

しかし、本語彙リストは開発途上であり、早期英語教育にとっての語彙のあり方を考察するためには、更なる検討を重ねる必要がある。

例えば、本語彙リストの基本コーパスは、*Let's Go* と *SuperKids* の二つのコースブックのレベル4までを適正レベルとして選定した。しかし、前述の通り、早期英語教育ではトピック中心の英語活動が多く、コースブックのレベルが、必ずしも各々の語の学習段階と対応しているとは限らない。上位レベルのコースブックでも、習得が容易な意味範疇の語が潜んでいる場合もある。今後は、トピックの観点から、上位レベルのコースブック内の語も語彙リストに含めるか否か

を検討する必要がある。

また、KUIS 語彙リストで独自に意味範疇分類を設定したことは、他のリストや先行研究と大きく異なる部分ではあるが、この意味範疇分類枠組みの妥当性について、就学期児童の母語である日本語語彙習得の観点を考慮に入れて、再度考えてみる必要もあろう。日本語と英語、両言語の語彙比較と並行して、就学期児童の日本語語彙習得の過程を知ることは、より精緻化された意味範疇分類枠組みの開発を目指すために意義深いものと思われる。

また、早期英語教育においては、定型表現やチャンクが多用される。本語彙リストでは、他の語彙リストにおける扱いに倣い、定型句をそのまま含めることをせず、語単位に分解して掲載した。Schmitt (2004) がその重要性を提言している定型表現やチャンクを、今後の語彙リスト開発でどのように扱っていくべきか、工夫が求められよう。

今後、KUIS 語彙リストの特徴を生かしつつ、更なる研究を進め、早期英語教育のための語彙習得研究へ寄与することはもちろん、実践的にも教育的にも示唆に富んだ貢献度の高い語彙リストへと改訂を重ねていきたい。

## 謝 辞

本研究は、神田外語大学言語科学研究センターでの委託研究（(独) 科学技術振興機構、社会技術研究開発センターの研究開発プログラム「脳科学と教育」(タイプⅡ)『言語の発達・脳の成長・言語教育に関する統合的研究』（研究代表者：首都大学東京 萩原裕子）のサブ研究領域「言語学・応用言語学に基づく、外国語能力の検査、判定、評価法の開発」（研究機関代表者：長谷川信子；研究分担者：井上和子、小林美代子、堀場裕紀江）の一部として遂行されたものである。

本研究を進めるにあたり、語彙リスト作成の基礎的部分に

関して、語彙習得の広い見識から有益な助言を下さった、堀場裕紀江神田外語大学大学院教授、また、基本コーパス作成・言語資料の情報収集のために昼夜を問わず尽力下さり、本研究の骨組みとなる部分を支えてくださった、味岡麻由美さん、西菜穂子さんに感謝の意を表したい。

また、基本コーパス作成の基本となるレマ化作業・品詞付与作業は、言語学的知見からきめ細やかな検証をして下さった、言語科学研究センター研究員の神谷昇さんに負うところが大きい。さらに、本語彙リストは、李榮さん、山方純子さんをはじめ、多くの大学院生や学部生の協力なしには作成に至らなかった。この場を借りてあらためてお礼を申し上げたい。

## 参考文献

- Cameron, L. (2001). *Teaching Language to Young Learners*. Cambridge: Cambridge University Press.
- CDI Advisory Board. (2003). *MacArthur-Bates Communicative Development Inventories*. <http://www.sci.sdsu.edu/cdi/> より 2005年10月15日取得.
- Council of Europe (Ed.). (2001). *Common European Framework of Reference for languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Folse, K. (2004). *Vocabulary Myths*. Ann Arbor, MI: the University of Michigan Press.
- Hindmarsh, R. (1980). *Cambridge English Lexicon*. Cambridge: Cambridge University Press.
- McArthur, T. (1992). *Longman Lexicon of Contemporary English*. Essex: Longman.

- Nation, P. (1990). *Teaching and Learning Vocabulary*. Massachusetts: Heinle & Heinle Publishers.
- Oxford University Computing Service. *British National Corpus*. Oxford: University of Oxford.
- Rixon, S. (1999). Where Do the Words in EYL Textbooks Come From? In Rixon, S. (Ed.), *Young Learners of English: Some Research Perspectives*, pp.55-71. Essex: Pearson.
- Schmitt, N. (2004). *Formulaic Sequences: Acquisition, Processing and Use*. Amsterdam: John Benjamins Publish Company.
- University of Cambridge ESOL Examinations. (2003). *Cambridge Young Learners English Tests Handbook*. Cambridge: University of Cambridge ESOL Examinations.
- 石川慎一郎 (2006). 「小学校英語教育のための語彙選定の視点：L1/L2 コーパスに基づく発信型語意表の開発」全国英語教育学会第 32 回高知研究大会（於高知大学）口頭発表，2006 年 8 月 6 日
- 今井むつみ，針生悦子 (2007). 『レキシコンの構築ー子どもはどのように語と概念を学んでいくのか』東京：岩波書店
- 小椋たみ子 (2000). 「マッカーサー乳幼児言語発達質問紙の標準化」『平成 10 年度～11 年度科学研究費補助金（基盤研究 (C)(2)）研究成果報告書』
- 久埜百合(2000). 『アルク 2000 語絵じてん』東京：アルク
- 小林春美，佐々木正人（編）(1999). 『子どもたちの言語獲得』東京：大修館書店
- 小林 美代子，長谷川信子，町田なほみ (2006). 「早期英語教育のための語彙リスト開発」JACET 英語語彙研究会第 3 回研究大会（於中央大学）口頭発表，2006 年 12 月 2 日
- 大学英語教育学会（JACET）教材研究委員会（編）(1993a). 改訂 3 版『JACET 基本語 4000』（JACET 4000 BASIC WORDS）東京：大学英語教育学会（JACET）

- 大学英語教育学会 (JACET) 教材研究委員会 (編) (1993b).  
『「JACET 基本 4000」における語彙選定の基準と手順』東京：  
大学英語教育学会 (JACET)
- 大学英語教育学会(JACET) 基本語改定委員会 (編) (2003).『大  
学英語教育学会基本語リスト(JACET List of 8000 Basic  
Words)』東京：大学英語教育学会 (JACET)
- 中條清美, 西垣知佳子, 内山将夫, 岩楯弘美, 山崎淳史 (2005).  
「英語絵辞書の語彙」『日本大学生産工学部研究報告 B』38,  
pp. 77-105.
- 中條清美, 西垣知佳子, 西岡菜穂子, 山崎淳史, 白井篤義 (2006).  
「小学校英語活動用テキストの語彙」『日本大学生産工学  
部研究報告 B』39, pp. 79-109.
- 西垣知佳子, 中條清美, 西岡菜穂子 (2007). 「小学校英語テキス  
ト出現語彙の意味領域による分析」『日本児童英語教育学  
会 (JASTEC) 研究紀要』26, pp. 15-25.
- 長谷川信子, 小林美代子, 堀場裕紀江, 町田なほみ, 味岡麻由美  
(2006). 「A Word List for Young Learners of English」全国語  
学教育学会(JALT) 第 32 回年次国際大会 (於北九州国際会  
議場) 口頭発表, 2006 年 11 月 3 日
- 山本麻子 (2005). 『子どもの英語学習－習得過程のプロトタイ  
プー』東京：風間書房

## 資料

### 資料 1 コーパス作成のための言語資料

#### ①基本コーパス作成のための言語資料

*Let's Go (2nd ed.) Starter-Level 4.* (2000). New York: Oxford University Press.

*SuperKids (New ed.) Level 1-Level 4.* (2005). Hong Kong: Longman.

#### ②その他の言語資料

##### ・海外早期英語教育教材

University of Cambridge ESOL Examinations. (2003).  
*Cambridge Young Learners English Tests Handbook.*  
Cambridge: University of Cambridge ESOL Examinations.

##### ・海外成人英語資料

Oxford University Computing Service. *British National Corpus.* Oxford: University of Oxford.

Nation, P. (2003). *Range Programme and the GSL and AWL Lists.* Retrieved March 10, 2006 from Victoria University of Wellington, the School of Linguistics and Applied Language Studies Web site:

<http://www.victoria.ac.nz/lals/staff/paul-nation/nation.aspx>

##### ・国内早期英語教育教材

久埜百合(2000).『アルク 2000 語絵じてん』東京：アルク

##### ・国内中学校用検定英語教科書

Columbus 21 (1年～3年) (2005) 東京：光村図書

New Crown (1年～3年) (2006) 東京：三省堂

New Horizon (1年～3年) (2006) 東京：東京書籍

One World (1年～3年) (2006) 東京：教育出版

Sunshine (1年～3年) (2006) 東京：開隆堂

Total (1年～3年) (2005) 東京：学校図書

Total active.comm (1年～3年) (2004) 東京：秀文堂

・国内成人英語教育教材

大学英語教育学会(JACET) 基本語改定委員会  
(編) (2003) . 『大学英語教育学会基本語リスト  
(JACET 8000)』東京：大学英語教育学会(JACET)

## 資料2 コースブック内での役割分類 (本文 2.1 参照)

言語資料として使用したコースブック内で、各語が果たす役割を分類するための一覧。語彙選定作業 (本文 2.5 参照) の際、語彙リストに含むべきか否かをこの情報に基づいて行った。

- Title
- Subtitle
- Unit
- Prompt
- Cue
- Key Sentence
- Words
- Grammar
- Phoneme
- Illustration
- Direction
- Instruction
- Choice (Multiple choice & True/False)

## 資料3 基本コーパスに付与した品詞一覧 (本文 2.3 参照)

語彙リスト作成の段階の一つとして、抽出された各語に品詞に関する情報を付与した。品詞の識別は、言語資料として使用したコースブックの用例を基に行った。下記は、使用した品詞の一覧である。

- noun
- pronoun
- proper noun
- verb
- be-verb
- modal
- adjective
- adverb
- preposition
- conjunction
- determiner
- interrogative
- interjection
- cardinal number
- ordinal number

資料 4 乳幼児の母語発達のプロセス研究（小椋，2000）による語彙項目分類枠組み（本文 2.4 参照）

語彙リスト開発の第一段階で、基本コーパスに付与した意味範疇の一覧（小椋，2000 に基づく）。その後、この意味範疇を改定し、最終版（資料 5 参照）を開発した（その改定・開発の過程は本文 2.4 で詳述）。

「ことばと身ぶり」		「ことばと文」	
A.	幼児語	A.	幼児語
B.	動物の名前	B.	動物の名前
C.	乗り物	C.	乗り物
D.	おもちゃ	D.	おもちゃ
E.	食べ物と飲み物	E.	食べ物と飲み物
F.	衣類	F.	衣類
G.	体の部分	G.	体の部分
H.	家具と部屋	H.	家具と部屋
I.	家庭用品	I.	小さな家庭用品
J.	戸外のもの	J.	戸外のもの
K.	人々	K.	おでかけ
L.	日課とあいさつ	L.	人々
M.	動作語	M.	日課とあいさつ
N.	時間	N.	動作語
O.	ようす・性質	O.	時間
P.	代名詞	P.	ようす・性質
Q.	質問	Q.	代名詞
R.	位置と場所	R.	質問
S.	数量	S.	位置と場所
T.	幼児語（その 2）	T.	数量
U.	会話語	U.	接続
V.	その他	V.	幼児語（その 2）
		W.	会話語
		HELPING VERBS	
		X.	その他



資料 5 KUIS 語彙リストに付与した意味範疇一覧（本文 2.4 参照）

*Cambridge Young Learners English Tests Handbook* (2003) の巻末語彙リスト分類を参考に、資料 4 を基に改訂したものである。一部の意味範疇は、後の語彙選定作業（2.5、2.7 参照）で削除した。

MAIN	SUB
ALPHABET	
NUMBER	NUM
	ONUM
GENARAL	
ANIMAL	
	PARTS
VIHICLE	
TOY	
SCHOOL	
FOOD/DRINK	FOOD
	FRUIT
	SWEET
	DRINK
CLOTHING	
	ATTACHMENT ACCESSORY
BODY	
BELONGINGS	
HOUSE	FURNITURE
	ELECTRIC
	ROOM
	INSTRUMENT
	KITCHEN OTHERS
LEISURE	
NATURE	
TOWN	
PARK	
ACTIVITY	
PEOPLE	
	FAMILY

MAIN	SUB
DAILY LIFE	
VERB	
TIME	HOUR
	DAY
	MONTH
	SEASON
	EVENT OTHERS
APPEARENCE	
DESCRIPTIVE	
FEELING	
QUALITY	
SCALE	
TASTE	
WEATHER	
OTHERS	
COLOR	
PREPOSITION	
ADVERB	
QUANTITY	
SPORTS	
	GOODS OTHERS
ABSTRACT	POSITION
	SHAPE
	UNIT
	MEASUREMENT OTHERS
HEALTH	
MISCELLANEOUS	

資料6 KUIS 語彙リストからは削除したが、指示語として  
使用可能な語彙一覧（品詞別）（本文 2.5 参照）

以下の品詞は、テスト項目作成の観点から削除したが、英語活動において指示語として使用が可能である点、他の語彙リストに収録されている場合が多い点を考慮して、別リストとして作成した。

Pronoun	I, my, me, mine, you(S), your, you(O), yours, she her(P), her(O), hers, he, his(P1), him, his(P2), we our, us, they, them, it, this, that, those, one
Proper noun	(country, city, person, Mr., Mrs., Miss. & Dr.)
Be-verb	be, am, is, are, was, were
Modal	do, does, did, can, will, may, wish
Conjunction	and, but, because, or, if
Determiner	a, an, the
Interrogative	what, when, where, which, who, whose, how

資料7. KUIS 語彙リストからは削除したが、指示語として  
使用可能な語彙一覧（意味範疇別）（本文 2.7 参照）

下記の意味範疇は、テスト項目作成の観点から、資料6で提示した品詞同様 KUIS リストからは削除したが、同様の理由から別リストとして作成した。

GENERAL	animal, insect, body, cloth, color, health, number, family, people, date, day, time month, season, town, country, world, shape
ABSTRACT	age, feeling, life, name, place, question
TIME	today, year
FOOD/DRINK	snack
MISCELLANEOUS	job, weather

資料 8. KUIS 語彙リスト所蔵語彙の JACET8000 レベル別・品詞別割合（本文の図 3 参照）

KUIS 語彙リストに収録される語（総語数 898 語）が JACET8000 の 1000～Plus（及びリスト外）の各レベルに該当する割合を示した。

JACET レベル		1000	2000	3000	4000	5000	
リスト全体	語数	336	156	105	15	25	
	%	37.4	17.4	11.7	1.7	2.8	
品 詞 別	n	語数	146	112	95	12	19
		%	16.3	12.5	10.6	1.3	2.1
	v	語数	105	17	5	2	3
		%	11.7	1.9	0.6	0.2	0.3
	adj	語数	36	25	5	1	3
		%	4.0	2.8	0.6	0.1	0.3
	adv	語数	30	2	0	0	0
		%	3.3	0.2	0.0	0.0	0.0
	prep	語数	19	0	0	0	0
		%	2.1	0.0	0.0	0.0	0.0
	JACET レベル		6000	7000	8000	Plus	なし
	リスト全体	語数	32	23	33	24	149
%		3.6	2.6	3.7	2.7	16.6	
品 詞 別	n	語数	28	21	28	22	123
		%	3.1	2.3	3.1	2.4	13.7
	v	語数	3	1	2	0	8
		%	0.3	0.1	0.2	0.0	0.9
	adj	語数	1	1	3	1	9
		%	0.1	0.1	0.3	0.1	1.0
	adv	語数	0	0	0	1	5
		%	0.0	0.0	0.0	0.1	0.6
	prep	語数	0	0	0	0	4
		%	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4

(町田)

261-0014

千葉県美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学

言語科学研究センター

*nahomijp@kanda.kuis.ac.jp*

(小林)

同大学院言語科学研究科

*m.kobay@kanda.kuis.ac.jp*

(長谷川)

同大学院言語科学研究科

*hasegawa@kanda.kuis.ac.jp*